

再度、基本から振り返る

「特別の教科 道徳」

内容項目の例(3・4年生)

- | | |
|--|---|
| <p>A 主として自分自身に関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ① 善悪の判断, 自律, 自由と責任 ② 正直, 誠実 ③ 節度, 節制 ④ 個性の伸長 ⑤ 希望と勇気, 努力と強い意志 | <p>B 主として人との関わりに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑥ 親切, 思いやり ⑦ 感謝 ⑧ 礼儀 ⑨ 友情, 信頼 ⑩ 相互理解, 寛容 |
| <p>C 主として集団や社会との関わりに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑪ 規則の尊重 ⑫ 公正, 公平, 社会正義 ⑬ 勤労, 公共の精神 ⑭ 家族愛, 家庭生活の充実 ⑮ よりよい学校生活, 集団生活の充実 ⑯ 伝統と文化の尊重, 国や郷土を愛する態度 ⑰ 国際理解, 国際親善 | <p>D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること</p> <ul style="list-style-type: none"> ⑱ 生命の尊さ ⑲ 自然愛護 ⑳ 感動, 畏敬の念 |

今回の学習指導要領の改訂では、子どもたちがこれからの社会を切り拓いていくための資質や能力を、より確実に身につけていくことが目指されています。その中で「特別の教科 道徳」として教科化される道徳は、どのような役割をもっているのでしょうか。道徳研究の最前線に立つ方々にお話を伺いました。

取材・文 ● 甲斐ゆかり(サード・アイ) イラスト ● あきんこ

「特別の教科」になって何が変わるのか

新学習指導要領は、小学校では2020年度から全面实施されます。「特別の教科 道徳」は、先行実施の一環として、それより一足早く2018年度からスタートすることが決まっています。

授業は、週1コマ、年間35回(1年生は34回)実施されます。また、これまで副読本が使われてきましたが、教科化されたことで、他教科と同様に検定教科書を使用することになります。それにもない、しつかりとした年間指導計画を作成することが求められています。

また、授業のあり方も大きく変わります。背景には、これからの社会の大きな変化があります。今後、グローバル化の進展や人工知能(AI)の躍進などによって、社会や職業のあり方そのものまでもが大きく変化する可能性があります。こうした時代には、高い志や意欲をもち、自立した人間として周囲と協力し、未来を切り拓いていく力をもつ人が求められます。

したがってこれからは、自分で課題を発見し、身につけた知識や技能を組み合わせて、よりよく課題を解決できる力が大事になります。また、課題の解決のために、他の人と協力したり話し合ったりしていく前向きな姿勢も求められます。このような思考力重視の方向に合致させるために、道徳の授業は「考え、議論する道徳」への転換が目指されています。

求められる指導と評価のあり方は

「特別の教科 道徳」の内容項目は上の通りです。

「内容項目」とは、道徳的価値を含む内容を簡潔かつ平易に表現したものです。また、「道徳的価値」とは、よりよく生きるために必要とされるもので、人間としての生き方の礎となるものを示しています。これらの道徳的価値を理解させるため、問題解決的な学習や体験的な学習などを取り入れた、多様で効果的な指導方法が求められています。

評価は、数値ではなく、記述によって行います。その際、他の子どもと比較して優劣を決めるのではなく、子ども自身がどのように成長したかを積極的に受け止め、励ます「個人内評価」として行うのが大きなポイントです。具体的な評価方法としては、授業の様子やポートフォリオをもとにしていくことなどが考えられます。

ポートフォリオとは、授業ごとのワークシートなどを児童ごとに個別にファイルにしてまとめたものです。なお、通知表の評価も記述式で行います。

【道徳科の目標】

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を多面的・多角的に考え、自己の生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

*資料はいずれも「小学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳編」(2015年文部科学省)をもとに作成。



立命館大学大学院教職研究科准教授

荒木 寿友 先生

Araki Kazutomo

専門は道徳教育、教育方法学、カリキュラム開発、ワークショップなど。対話やワークショップを核とした研究と共に国内外の教育・教師支援活動を行う。近著は「ゼロから学べる道徳科授業づくり」(明治図書)。

ここからは、道徳教育の先端的研究に携わる先生方に、これからの道徳教育の実践法について、具体的に教えていただきました。

先生の工夫や努力によって授業は大きく変わってきます

検定教科書をどう使うか

来年度からは検定教科書を使った授業になります。読むことよりも、内容項目にかかわる部分をしっかりとつかめるように工夫してください。

教科書で取り扱われている題材を見ていくと、読み物教材がもっとも多くなっています。詩などの短いものは除いて、分量があるものを丁寧に読んでいくと、授業時間の半分はかかりそうです。残りの時間で「考え、議論する道徳」が果たして実践できるか。これは先生にとって課題のひとつになります。

そこで、いかに短時間で内容のポイントをつかませ、考えさせて対話させていくかが大事になります。素材文を先生自身が読み聞かせることにこだわる必要はありません。そこに力点を置きすぎず、まうと、国語の授業になってしまいます。場合によっては、先に教科書を読んでもよいような宿題を出してもいいでしょう。子どもに読ませる場合は、文章の細部の表現に子どもがとらわれ、授業が違う方向にいかないように気をつけましょう。読み進めながら問いを挟む、という従来の場面発問の方法も、国語の内容に傾きがちなるので気をつけてください。

発問をどのように工夫するか

発問の仕方は非常に大切です。例えば、「ここで主人公はどう思ったでしょう」といった場面発問ばかりだと、子どもは「答えるべき望ましいこと」がほしい

わかってしまいます。

それよりも、実は子どもたちが心のなか口には出しにくい「よこしまな考え」を、先生があえて言うてみるのはどうでしょう。「正直」が題材なら、例えば「ひよつとして、正直に言わずに、黙っていたほうがよかったですんじやない？」と投げかけてみる。そうすると、子どもは心の中を見透かされているような気持ちになり、「正直とは何か」について考え始めるかもしれません。このように、時には望ましいとされることの逆を言うなど、子どもの心をゆさぶるような臨機応変さも必要です。

子ども同士が議論することももちろん大切ですが、同じ世代、同じ地域に生活している子どもの場合、それぞれの考え方が劇的に違うということはあまり見られないことが多いです。そこで、子どもが気づかない見方を先生が提示してあげると、授業はより豊かなものになり、価値理解も深まっていくと思います。

授業をどうまとめるか

授業を「きれいにまとめる」ことにも、こだわりすぎる必要はありません。授業は1コマですが、その結果については長いスパンで考えたほうがよいと思えます。

教科書の題材は基本的に1コマ45分内にまとまるようにそれぞれ作られています。子どもが自分の生き方を見つめ、道徳性を身につけるといふ大きな目標は

年間を通してどの題材でも共通していることです。そこまで心配する必要はないでしょう。

それに、教師が無理にまとめようとしなくても、子どもは自分なりの答えを見つけてよとするものです。授業は終わっても、家に帰って考えたり、ワークシートに後で記入してきたりして、自分の納得する落としどころを探そうとするでしょう。

価値理解についても、その学年なりの理解ができればよいととらえます。道徳の授業はもちろん価値理解が大前提ですが、そこに力を入れすぎると、今度は価値の教え込みになってしまいます。年間を通して何度か実践を繰り返していけば、授業の落としどころがつかめてくるはずです。



●続いて、多くの先生方が課題を感じている「評価」についておたずねしました。

道徳の「評価」と教師の「見る目」

「特別の教科 道徳」の評価について、今回特に強調されているのは「数値評価はしない」「個人内評価をする」「（評価文は）認め励ますような表現にする」「個々の内容項目ではなく、大きくくりなまとまりで評価する」という4項目です。とりわけ後者2つが今回のポイントになります。

「認め励ます」には2つの方向があると思っています。ひとつは、「こんなに成長したね」と、表に見える部分を評価すること。もうひとつは、子どもたち自身が気づいていない部分、「こんなことに気づいていたね」と子どもたちの無自覚の部分を評価することです。

子どもは、自分がどこまでできているか、自分の実力を何となくわかっています。また、先生がそれを知っていることもわかっています。そんな、「自分も人もわかっていること」を評価されて、果たして子どもは本当にうれしいうか。それよりも、「自分では気づかなかったけれど、先生がこんなことを認めてくれた」という部分があったほうが、ずっとうれしいはず。

教師の「人を見る目」というのは、他の人では見えにくいところを判断する、その力にあると私は考えています。子どもの

道徳科における評価の在り方

道徳科における評価の基本的な考え方

評価とは、児童生徒の側から見れば、自らの成長を実感し、意欲の向上につなげていくものであり、教師の側からみれば、教師が目標や計画、指導方法の改善・充実に取り組むための資料となるもの。

- 道徳科の特質を踏まえれば、評価に当たって、
 - ・数値による評価ではなく、記述式とすること、
 - ・道徳科の学習活動における児童生徒の具体的な取組状況を一定のまとまりの中で見取ることが求められる。その際、個々の内容項目ごとではなく、大きくくりなまとまりを踏まえた評価とすること、
 - ・他の児童生徒との比較による評価ではなく、児童生徒がいかに成長したかを積極的に受け止めて認め、励ます個人内評価^(*)として行うこと、
 - ・学習活動において児童生徒がより多面的・多角的な見方へと発展しているか、道徳的価値の理解を自分自身との関わりの中で深めているかといった点を重視すること、
- に、留意する必要がある。

※個人内評価……児童生徒のよい点をほめたり、さらなる改善が望まれる点を指摘したりするなど、児童生徒の発達段階に応じ励ましていく評価のこと。

(2016年7月22日専門家会議より「道徳における評価のありかた」一部掲載)



もつ価値を見抜き、それを育てていく、いわば「鑑識眼」と言うべきものです。しかし、あくまで評価は客観的な資料に基づいて行わなくてはなりません。そ

こで、ワークシートなどに書かれた内容を「証拠」として、評価する必要があります。

教師にしか見えない部分をうまく子どもに伝えていけば、もつと深く「認め励ます」評価になると私は思います。

道徳で評価すべき部分はどこか

また、「大きくくりなまとまりを踏まえた評価をすること」がすすめられています。この「大きくくりなまとまり」とは何を指すかですが、例えば学期間・学年間という時間的な区切り、あるいは「内容項目

のA～Dの「4つの視点」などの視点ごとの区切りが挙げられると思います。

注意しておいてほしいのは、道徳科においては、「観点別評価は妥当でない」ということです。例えば、「積極的に友達と話し合っているか」などという、ある態度についてだけを取り出して評価しても、不十分だということです。また、特定の内容項目だけについて評価するのも、不十分です。道徳においては、活動全体を通して、子どもの変化を見る必要があります。とはいっても、「大きくくり」に捉えることは実際には困難もありますし表記も抽象的になってしまいますので、



道徳の授業がうまい人は、
教科の教え方もうまい。
子どもの考えをうまく
引き出す力に長けています。



保護者が見る評価の文面は具体的な表記
(例えば「〇〇を扱った授業では「でし
た」など)になってもいいと思います。

ポートフォリオを見るときの ポイントとは

ポートフォリオ評価については、ファ
イリングをすることによって、それまで
ファイリングしたものを振り返る機会を
大切にしてほしいです。学期の前半、後
半と、子どもがたまったファイルを見返
して、取捨選択をし、自分が何を残すか
を理由付けしたりしていくことは、教育
的にも大きな意味があります。半期に一
度は振り返りの時間をもつことで、教師
だけでなく子ども自身も、自らの変化を
とらえることができるでしょう。



子どもが書いている振り返りの文章で
は、例えば自分たちの学級の様子と結び
つけている記述があるなど、日常生活と
道徳の結びつきを子どもが発見してい
るかどうか、評価するときに注目したい
ポイントになります。

一方、書くことが苦手な子どももいま
すから、その場合はパフォーマンス評価
やエピソード評価を対象とするといひで
しょう。「認め励ます」評価をするには、
子どものよい所を発見することが必須で
す。

人間、他人の悪いところはよく見えま
すが、よい点を見つけるのは意外と難し
いものです。今回の改訂で、これまでの
先生の子どもへの見方も変わるかもしれ
ません。

道徳の授業と他教科の 意外なつながり

興味深いことですが、道徳の授業がう
まい先生は、教科の教え方もうまいです。
しかし、その逆は必ずしもそうではあり
ません。

道徳の授業がうまい先生は、子どもの
意見を上手に受け止め、考えを引き出す
ことに長けています。また、学級経営の
手腕も優れています。

今の学校教育は「子どもが主役」と言
われます。しかし「教える」という行為
は、実際には教師が主役である場合が非
常に多いのです。教科の授業は教える内
容が既に決まっていますから、教師は子
どもの意見を引き出す工夫をしなくても

ほとんどの授業を進めていくことができ
ます。

しかし道徳においては、教師は主導的
な役割よりも、子どもの心の動きや状況
を見ながら、授業が建設的なものになる
ように働きかけるファシリテーターの役
割を強く求められます。道徳の授業の流
れをつくっていくのは、子ども自身なの
です。

道徳の授業がうまくいっている学級は、
子どもたち自らが過ごしやすいクラスづ
くりを進めていることが多いです。それ
は学期が進むといつそう明らかになっ
てきます。

次期学習指導要領では、「主体的・対
話的で深い学び」の視点に基づいた授業
改善を求めています。道徳の授業を工夫
し研究することは、一見関連が薄いよう
に見えて、結果的には教育活動全体で主
体的・対話的で深い学びを効果的に実現
するための早道かもしれません。

▽ 評価の方法

- ポートフォリオ評価
→ワークシートやノートに振り返り
や感想を記しておき、その成果をフ
ァイリングして評価の材料とする
- パフォーマンス評価
→問題解決的な学習を導入した際に、
問題場面をパフォーマンス課題と
設定して評価する
- エピソード評価
→様々な場面における見取りの蓄積
で評価する

授業の実践例に学ぶ



服部 敬一先生

Hattori Keiichi

大阪府大阪市立豊仁小学校校長。道徳授業の評価について20年以上にわたって取り組む。近著『あなたが道徳授業を変える—ベテラン小学校教師からの8つの提言』(学芸みらい社)。

次に、実際の学校での授業について見ていきます。今回は、大阪市立豊仁小学校での取り組みについて、校長の服部敬一先生からお話を伺いました。

「なぜ」を教えることが 未来を生きる力につながる

指導案作成は内容項目 ではなくそれを下支えする 考え方に着目する

私は、道徳科においても1時間で達成できる具体的なねらいを設定し、その達成状況によって評価を行っています。

これまで道徳の授業は、一度の授業で達成できる即効性を目指すものではなく、時間が経ってはじめて表れるものだと考えられてきました。しかし、例えば算数の「三角形の面積の求め方」の授業では、いくら授業全体の雰囲気がよくても、面積の求め方がわからなかったら、よい授業とは言えません。道徳も同じで、教師はたとえ小さなことでも、1時間の中で子どもに何らかの変容が起こることを期待して授業を設計しているはずで

そこで、「ねらい」の設定が重要になります。ポイントは、内容項目を下支えする考え方に着目することです。今までの道徳は、内容項目がそのままねらいになっていることが多いように思います。例えば「正直な明るい心で生活する」とあれば、ねらいは「〜という心情を育てる」となります。ですが、同じ「正直、誠実」でも、『金のお』では「正直な人とうそをつく人に対して抱く評価は異なる」、「羊飼いとオオカミ」では、「うそをつく人は信用を失う」というように、教材に含まれている考え方は異なります。これら内容項目を下支えする考え方を授業のねらいにすれば、1時間の目標が非常に明確になった指導案が

作成できます。

ねらいを達成できたかは 道徳ノートの書き方でわかる

授業では毎時間の最後に、子どもたちに「道徳ノート」を書かせています。1時間のうち、何でもよいから「わかったこと」を書くように指示をしています。書いてある内容で、授業のねらいが達成できたかがわかります。

例えば、先ほど挙げた「正直、誠実」の授業で、子どもが「正直で明るいことはよいことだとわかった」と書いていたとします。一見よさそうに見えますが、これは授業が弱かったことを表しています。なぜなら、内容項目に触れているだけで、「ねらい」について書かれていないからです。

『金のお』であれば、「正直に生きていると、他人もほめてやりたいという気持ちをもつ」ということが理解できる必要があります。

授業で最も大事なものは、「ねらい」が達成できたかどうかです。活発だったとか、アクティブだった等ではありません。授業のねらいが達成できた上で「主体的、対話的」であったらよいのですが、「主体的、対話的」で「浅い学び」では困ります。「浅い学び」とは、「もともとわかっていること(正直で明るいことはよいこと)を学んだ」だけということです。そうではなくて、正直がなぜよいことなのか、その理由や根拠に気づかせる授業を目指してほしい。子どもたちが今ま

で考えもしなかったことが出てきたり、「なるほど!」と腑に落ちるような学びができたならば、子どもにとつて必ずそれは「深い学び」となるでしょう。

子どもには一時的感情に 流されない本質を見抜く力を 身につけてほしい

評価について迷う先生方も多いですが、大前提として、「その時間の中で何ができたか」について評価することが重要です。子どもがもともと持っている性格や生活によって培われた人格と、日ごろの指導で育った力とは区別する必要があります。授業ごとのねらいが明確であれば、教師として何を子どもに伝えられたか、どんな変容を子どもに起こすことができたかを見取れる可能性が出てくるでしょう。

これからの社会は非常に不透明です。未来を予測できない社会で生き抜く子どもの将来を考えれば、「決まりは大事だ」と価値を教え込むことよりも、「決まりがなぜ大事なのか」と問われたときに、他者を納得させられる言葉をどう身につけさせるかが重要だといえます。

「正しいのはこういう理由があるからだ」という、価値を下支えする考え方を教えることで、子どもたちの頭の中にフレームワークができ、自分で考えて判断ができるようになります。

そういう汎用性のある事柄を学ばせることが大切だと私は考えます。

●学習指導過程

学習活動	主な発問と児童の思考の流れ	指導上の留意事項
1 金、銀のイメージについて考える。	(金・銀・銅メダルを見せながら) どれが良いですか。またそれはなぜですか？	・お話の中に出てくる金が高価なもので、皆が欲しがれる価値のあるものだということをおさえておく。
2 「金のおの」を読んだ話し合う。		
① 正直な木こりの気持ちについて。	おのを落とした時、正直な木こりはどんな気持ちだったでしょう。	・動作化を取り入れて、木こりにとおのは暮らしていくのに重要なものだったこと、大きな失敗であったこと、わざとではないことをおさえる。 ・木こりがうっかりおのを池に落としたことをおさえる。
② となりの男の気持ちについて。	おのをわざと落とした時、となりの男はどんな気持ちだったでしょう。	・役割演技を取り入れ、大声の内容を考えさせ、そのときの気持ちを問うことで本心に気づかせる。 ・男がわざとおのを池に投げ込んだことをおさえる。
③ 神様の二人に対する違いについて。	正直な木こりに3つ全てのおのを与えたくなかったのはどう思ったからでしょう。 となりの男におのを1つも与えなかったのはどう思ったからでしょう。	・神様の行動面をおさえた上でそれについてどう思ったのかを引き出す。
④ 二人の今後の生き方に向けて込められた神様の思いについて。	神様は二人に、今後どのようになっていて欲しいと考えたでしょう。 ・ほうびを与えることでこれからも正直に生きて欲しいと願った。 ・こらしめることでこれからは正直に生きて欲しいと願った。	
3 道徳ノートを書く。	今日の学習でわかったことを書きましよう。	・本時の学習でわかったことを書かせることで自分の学習について振り返らせ、自分の学びを整理させる。 ・評価の資料とする。

●道徳ノートと評価

「金のおの」の学習を通して、正直に話さないと相手の心にきずをつけてしまうことを理解しました。

「金のおの」の学習を通して、自分自身が正直な人のことが好きで、うそつきはきらいだということに気づきました。

「金のおの」の学習を通して、うそつくと相手が嫌な気持ちになることがわかりました。

●成果と課題

成果

本時のめあてを「神様がうそと正直をどう感じるか」と設定したことで、神様の考えを主に置いた授業になり、うそから感じる不快、正直から感じる潔さに気づくことができました。役割演技を取り入れることで動きのある授業となり、児童が心情などを読み取るための手助けとなった。

課題

正直者には良いことが起こり、うそつきには嫌なことが起こると書くだけの、ねらいに十分達成できていない児童がいた。神様がうそと正直から感じた気持ちを役割演技させるなど、さらに発問の仕方を工夫するなどの手立てが必要だった。

●公開授業の方針(一部)

- * 「指導と評価の一体化」の立場から、1時間で達成可能な具体的なねらいを設定し、ねらいの達成によって評価を行う。
- * 公開授業は特別なものではなく、毎週行っているものと同じようなものとして実施する。
- * 内容項目は「特別の教科 道徳」の内容を用いる。



●発問の例

▼中心発問

正直なきこりに3つ全てのおのを与えたくなかったのはどう思ったからでしょう。

失敗したことを認めたことが立派だと思ったから。

欲に負けず正直に話したことをえらいと思ったから。

となりの男に1つもおのを与えたくなくなったのは、どう思ったからでしょう。

わざとおのを落とすなんて悪いやつだ。

うそをつくなんて悪いやつ。

正直に話してくれた時に感じる気持ちと、うそをつかれた時に感じる気持ちを引き出す。

